

## 第一節 祈願で心が救われる

### 一生懸命頑張る気持ちに

九月二十三日、私は偉光ひかりのやかた会館に向かっているはずの実家の母に、「きょうは祭典日、私も少しでも開運がかなうように、自分を見つめてみたい」と、携帯電話のメールで気持ちを伝えました。

そして、その五分後、近くの友人から電話があり、供丸姫先生が神の世界に戻られたと、事実のみを聞かされました。一瞬、意味が分かりませんでした。ただ体が震えてきて、どうすればよいのか、どのように考えればよいか、放心状態になりました。

祈願しているうちに、頭の中を駆け巡るいろいろなことが、少しずつ整理できてきました。そして、ついにこの日が来てしまったと、理解することができたのです。考えれば考えるほど、いつかはこの日があることにどうして気づけなかったのか、供丸姫先生に甘えきつてい

て、何も悟れていなかったことを思い知りました。

以前、人は百二十歳まで生きられるものと伺ったことがあり、供丸姫先生もそれくらいまではいてくださるものと、安心していました。しかし、供丸姫先生は、直使としてそれは厳しい道を最後まで歩み通され、ご自身のお命を私たちの仕合せのために捧げささ尽くしてくださいました。

私が初めて供丸姫先生を知ったのは、中学二年生の時でした。友輝会ゆうきのかいのころには、実家の奈良からよく夜行バスで神総本部に伺いました。当時、お教えいただいたことが、今の私の心の原点になっているような気がします。

結婚して、奈良から茨城に移り、とても不安だった時、近くに偉光会館があったおかげで、いつも供丸姫先生を心のよりどころとして、安心して生活することができました。供丸姫先生のご教育は、いつも私の心の力の源でした。

もう関西には戻れないかと思っていたところ、五、六年たって、突然主人が転勤となり、兵庫に移りました。主人の実家が車で二十分の距離となり、どちらの親とも遠く離れた所での育児に大変さを感じていた私は、本当に大きなご守護を実感しました。

ただ、独身の時のように、いつでも好きな時に神総本部にも行けず、子供ができてからは、以前のように何度も繰り返し学ぶこともできなくなってしまいました。ですから、供丸姫先生にはとても顔向けできない状態でしたが、直使が近年どんどんと深い真理を表されてきている